

第45回日本のうたごえ全国協議会総会

方針

はじめに

町を、暮らしを押し流し奪い去っていく津波の映像が今も目に焼きついている3・11。しかし、震災から1年近く経とうとしている今も、人々の暮らしは国の遅れと共にますます深刻になっている。昨年、私たちは全国総会で、「今 生きる人々へ 共感と希望の歌を！」を合い言葉に新たな活動へとスタートしたその一カ月後に、震災と原発事故という未曾有の危機に直面した。

その中でうたごえは、被災直後の被災地からのうたごえに励まされ、全国も避難所で街頭での募金、歌の普及、チャリティーコンサート等をおこない、あらためて歌の持つ意味、歌の力を感じ合った。そして今回の震災が多くの人々に感じさせたのは、絆、家族、つながり、連帯の大切さだった。復興の槌音さえ響かない被災地、出口が見つかからない閉塞感と共に、いたるところで起こる現実を前に、人間の尊厳を取り戻す、人間らしく生きる力は切実に求められている。

震災直後、この時に祭典を開催する意味は、と問いかげながら、準備を進めた2011年日本のうたごえ祭典 in ちば（以下、ちば祭典）は、祭典の合い言葉「つながる・広がる・共感、明日への希望」が、被災者に心を寄せ、真の震災復興へ、原発のない社会へと向かう運動の力になることをつかみあいなから、3日間のべ13000人の参加で大きく成

功させた。

今、世界でも「アラブの春」「われわれは99%」「格差なくせ」の声と行動が伝えられ、核兵器のない平和で公正な社会を求める流れが大きくなっている。

日本では、東日本大震災から、復旧・復興、「原発ゼロ」をめざすとりくみが全国で展開された。また、政府が進めようとしている消費税増税と社会保障改悪に反対する運動、環太平洋連携協定（TPP）への参加や、沖縄の新基地建設を許さないたたかいは幅広い共同で取り組まれている。

しかし、一方で、自由を圧殺する教育条例などを掲げる大阪「橋下・維新の会」が市政を握るなか、憲法の自由と平和的生存権を保障した国づくりへ人々の心をつなぐ文化、音楽・歌の力がますます求められている。

真の原発事故収束、震災復興へ、住民・国民本位の国づくりへ、音楽文化の力を豊かにして平和で健康なうたごえを、地域・職場の人々と共にすべてのサークル・合唱団から起こしていくために、今総会方針を提案したい。

2011年度 活動のまとめ

方針へ「みんなうたごえ」を旺盛に展開し、平和憲法・九条をまもり、いかす。共に生きる町づくり・地域づくりのうたごえを広げる。

「演奏・普及活動」

【被災者支援・復興のうたごえ】

大震災を受け、日本のうたごえはただちに震災救援の取り組みを全国

に呼びかけ、ホームページに「地震情報掲示板」を立ち上げ、安否情報、支援情報を共有した。

街頭で歌っての募金に始まり、予定されていたコンサートやうたう会を「復興支援」の目的に変え成功させ、チャリティコンサートを音楽家、音楽愛好家と共同で開催するなど多彩に繰り広げられた。

全国協議会事務局として取り扱った救援募金約790万円の他に日本赤十字やあしなが育英基金などを通しての募金、直接、被災サークル・合唱団、協議会に送られたものを含めると募金総額は1000万円以上となり、被災地のうたごえ協議会や全国からの救援の取り組みに生かされた。

被災地はもとより、全国各地で震災の影響や「計画停電」で会場が使用できなくなるなど、歌う活動が困難をきたす中でも、震災直後から「うたで励ます」「うたが励ます」活動は旺盛に繰り広げられ、救援募金活動等と合わせ大きな成果を上げた。

宮城では地震直後から仙台合唱団の事務所をセンターに炊き出しがおこなわれ、全国の救援募金が役立てられた。

東北からの通信は、歌うこと、うたう仲間がいることがこれほど希望を生み出すものだというのを改めて実感させ、「こんな事態の時に歌っていていいものだろうか？」との戸惑いを「歌を力にしていこう」と一歩前に出る力に変えていった。

被災地に演奏支援で入る活動もおこなわれ、避難所でのミニコンサートやうたう会、仮設住宅でのうたう会などは、被災者の心を暖めた。演奏を届けるだけではなく思い切り声を出せる、思い一つに歌える環境をつくることも大切な取り組みとなった。

これらの活動を通じて、今、何を、誰に向かって、どう歌うのが常に問われた。ひとつひとつの歌、ひとつひとつのこぼれを吟味しながら再創造していく過程は、歌うことの意味を深め、音楽に真剣に向かい合う姿勢を培った。

C D制作の中で歌われた「ふるさとの山影」をはじめ、「私の子どもたちへ」「あなたが夜明けをつげる子どもたち」などうたごえが大切にして

きた歌が、このような事態の中でも、こころを前に向ける音楽として存在したことの意味は大きい。

「ふるさとの山影」は、ちば祭典の企画の柱の一つにも位置づけられ、全国の連帯をすすめる大きな力となった。

また、被災地に思いを寄せ、復興をうたう歌がたくさん創られ、歌われている。

【原発のない社会をめざすうたごえ】

東電福島第一原子力発電所の事故を受け、各地で原発なくせの集会やデモが取り組まれ、うたごえも積極的に参加してきた。

日本の音楽界でも「原発に頼らない社会」へのメッセージを投げかける作品や取り組みが注目を浴びている。

日本のうたごえ全国協議会として「原発のない平和で安心できる日本（世界）をめざすうたごえを」の声明を発表し、原発反対の歌をうみだし、うたいを広げることを呼びかけた。

詞の応募に対し短期間に100篇の詞（ことば）が寄せられ、この問題に対する関心の高さ、創作意欲を感じさせた。5編が入選詞となり、曲の募集が始まっている。

【うたは闘いととも】

日本航空労働者の解雇撤回闘争を励ますうたづくりの呼びかけにこたえ、多くの作品が生まれた。「あの空へ帰ろう」（森木一馬作詞、武義和作曲）は全国で歌われ、争議団でも「あの空へ帰ろう」を合い言葉に「自分たちの歌」として支援集会の企画に位置づけられるなど闘いを前進させる大きな力となっている。

その他にも不当解雇や公務員攻撃、教育や保育行政の改悪などに対する闘いに歌を創り歌でたたかう取り組みが全国で進められた。

国鉄のうたごえは、勝利的和解を勝ち取った闘争支援への感謝と報告、さらに他の職場の闘いへの連帯を込めて演奏を広げた。

職場のうたごえは、職場や労働者の要求を歌にして闘いを励ます演奏

活動をし、その中で、医療や保育の現場から若い労働者が参加してきていることも特徴である。

地域労連や労働組合が文化企画を中心に据えた集会を開催し、うたごえも大きな力を発揮し成功に寄与している例も生まれている。

埼玉合唱団が協力し、建設職人の労働組合埼玉土建の40周年行事に、組合員360人の合唱団を組織し、森山良子さんとのジョイントコンサートを成功させた取り組みは「近年の労働運動の快挙」（柴田泰彦埼玉労連議長）と評された。

【生きる力のうた「こえ」】

「孤立社会」といわれる状況がある中、歌い交わしたい、つどいたいという要求を反映して各地でうたごえ会、うたごえ喫茶、うたごえ酒場は盛況である。地域コミュニティづくりに貢献し、特に高齢者にとつての歌う場は「生き甲斐」の一つになっている例も数多い。幅広い層から要望されていた「使いやすい歌集」を制作し好評を得ているが、さらなる普及と、歌のリーダー、伴奏者の育成、うたごえ会、うたごえ喫茶のネットワークづくりなど、歌う要求をかなえ運動の裾野を広げていく条件が広がっている。

【広がる共同とうた「こえ」】

核兵器廃絶の運動では、各地の6・9行動、平和行進に歌をもって参加してきた。3・1ビキニデーでは静岡のうたごえを中心に「海に生きたあなたよ」他を演奏、焼津市の市民合唱団との交流も進んだ。原水爆禁止世界大会では広島集会での開幕演奏、長崎集会での「原爆を許すまじ」をはじめ、分科会やフィナーレでうたごえを響かせ、女性のつどいでは「平和の旅へ」が演奏された。合唱構成「平和の旅へ」は初演以来200回の演奏を数えた。

日本母親大会は広島で開催され、広島のうたごえは開催地の実行委員会の重要な役割を担い、本大会での文化企画、文化の夕べ、分科会での吉永小百合さんと共に歌う企画などを大きく成功させた。

全国障害者問題研究会全国大会では大阪のうたごえも協力し、文化企画の合唱構成「もつと高く」を100人のステージで成功させた。

青森で開催された日本高齢者大会では青森のうたごえが中心となり、全国から参加したうたごえの仲間も加わり文化企画を成功させた。

日本平和大会は沖縄で開催され、沖縄のうたごえを中心に成功の一翼を担った。

9条の会や革新懇運動、地方選挙などで共同の取り組みが広がる中、うたごえが果たす役割も大きくなっている。その内容も、企画の重要な役割と位置づけられる例が増えているのも特徴である。

きたがわてつさんは憲法をうたう100回コンサートを実施、各地のうたごえも協力しながら70回を数えた。

佐賀・合唱団コールぼけつとは、「悪魔の飽食佐賀公演」の成功に貢献し、音楽での共同を広げた。

このほかにも、合唱団の周年記念の演奏会、企画が数多く取り組まれ、それぞれ、はばひろい人々との共同の中で成功させているのも今年度の特徴である。

【創作活動】

2011年の創作活動は、大震災と原発事故という想像もできなかった大きなできごとの中で、被災地でも全国でも、それまでとは大きく違う取り組みが進んだ。もちろんこれはうたごえ運動だけではなく、プロ・アマ問わず様々な分野でも同様だった。「私たちに何が出来るのか」「何のために誰のためにつくり歌うのか」という真剣な問いから、詩のひとことひとことが変わっていった。大きな悲しみや怒り、告発、励まし、連帯、復興への願いを込めた数々の歌がつくられ、人と人の心をつなぎ生きていく力となっていた。

11月のオリジナルコンサート（以下、オリコン）にもこうした活動

は反映され、オリコン講評委員の武義和さんは「今年は詞も音楽も充実していたものが多かったし、ともすれば使い（歌い）古されていた『ことば』が、再び輝きといのちを取り戻したとも言えそうだ。被災をしなかつた私たちも心が大きく動いて、そのふるえが、うたにいのちを吹き込んだのではないだろうか」と総評に書かれている。オリコンで発表された作品はすべて「オリジナルソングブック」に収められている。全国でおおいに活用したい。

2011年全国創作合宿は今年没50年となる荒木栄の地・大牟田で開催、彼の歌づくりから学んだ。また、そこで多くの詞曲の中から生み出された「あの空へ帰ろう」は、その後短期間に全国で歌われ、日本のうたごえ祭典で不当解雇と闘う日航労働者が舞台に乗り観衆と心を繋ぎ合った。そして、言わずにはいられない思い「ふるさとを汚したのは誰」に大きな共感が広がるなど創作曲が大きな力を発揮した。

各都道府県や地域ブロック、産別でも、多くのサークル・合唱団で創作活動を積極的に位置づけ、創られた曲を演奏し、創り手を励ます取り組みが進んでいるが、さらに創り手を増やし、学び・実践・交流の場として「全国創作合宿」（2012年は5月11〜13日、山形・蔵王で開催）の位置づけを高めることが求められる。また、全国の取り組みを日本のうたごえオリコンにもっと反映したい。

現在「原発ゼロ」をめざす歌の募集の呼びかけに応え、多くの詞曲が寄せられている。今こそ、人々の心をふるわせ、心つながうたを生み出し広げていこう。

〔器楽活動〕

全国でアコーディオンサークルが活動し、楽器の魅力を引き立たせながら、演奏活動をおこない、また合唱やうたごえ喫茶の伴奏者としても活躍している。

ちば祭典では、アコーディオンオーケストラの企画が好評、若いメン

バーの参加も目立ち、「人間の歌」を共に歌う姿も見られた。ピアノ、ギターなど楽器演奏に対する要求もあり、また、共に音楽をつくっていく上で器楽の位置づけを高め、養成講座の開催、ネットワークづくりも求められている。

方針② 合唱発表会を地方、産業別、全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い、創造の前進をめざす場にする。

〔合唱発表会運動〕

各地の合唱発表会は、参加団体をふやす意識的な取り組みの中で、東京、京都、愛知で大幅に参加団体を増やしたのをはじめ全体として昨年からの約100団体増の1365団体となった。

合唱発表会（交流会）を、協議会活動の柱の一つに位置づけ、参加団体を増やす事を目的意識的に追求した結果である。

愛知では、名古屋東部地区を立ち上げ、新しく11団体が参加するなど広がりをつくった。

未開催県での開催については、滋賀がしばらくぶりの交流会を7団体でおこなったほかは新たな開催県をつくる事が出来なかった。引き続きの課題である。

産業別合唱発表会は9産業別でおこなわれ、職場での歌い、集う環境が悪化する中でも参加団体数は全体として昨年を維持している。

全国合唱発表会は7部門で近年最高の294団体（オリコン含む）が参加し、参加者数も増えている。初参加の団体も増え新鮮な風を送った。

3部門同時開催や、祭典企画のリハーサルとのバッテリーングなど、充分に聞き合い学びあう環境を整える点や、参加団体に義務づけられている要員登録が不十分なことなど、日程設定や運営上の課題を残した。

方針③ 地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典

の長期開催計画を持つ。

「日本のうたごえ祭典 in ちば」

2011年日本のうたごえ祭典 in ちばは、大音楽会5500人、コンサート2000人、全国合唱発表会・オリジナルコンサート5500人のべ13000人の参加で大きく成功した。

東日本大震災と原発事故をうけ、開催地千葉県も被災地であり、原発被害もうけている地域である事もふまえ、この祭典を成功させることで、被災地を勇気づけ、復興の力にしていこうと意思統一がされた。

キャッチコピーも「つながる・広がる・共感」に「明日への希望」を加え、大音楽会テーマも「環境」を「生命」に変えるなどして企画の内容を鮮明にしながら取り組まれた。

震災からの復興、原発事故への怒り、日航労働者との連帯、沖縄への連帯、平和や憲法への思いなど、日本の社会が抱えている課題を象徴的に取り上げ、生きる希望を歌い上げた企画は、映像や照明を効果的に使った演出もあり、感動的なステージとなった。

開催地千葉では、各ステージの中心にサークル・合唱団が配置され、企画の成功に奮闘したことをはじめ、メーデー、日航労働者を励ますつどい、震災復興チャリティーコンサートなど、県内の諸団体との共同を広げた取り組みが、参加者組織、音楽づくりを生かされた。

「Great Journey」のステージで、県合唱連盟への働きかけを強め、歌い手組織、練習会での協力などで幅広い共同を実現したのをはじめ、環境問題、食と農、女性、青年、シニアそれぞれの取り組みで新たなつながりを広げて行った。

大音楽会チケット普及では開催地目標に届かなかったものの、賛同金、賛同広告、事業活動などいずれも目標を大きく上回り、全国の連帯の中で、コンサート、大音楽会とも満席で成功させることが出来た。

宮城をはじめ東北の被災地からは、1人でも多くの仲間が祭典に参加

することで被災地の思いを全国に発信し、全国からの支援に対する感謝の気持ちを届けようと近年にない参加者を組織した。全国の仲間もこれに応え、東北の仲間を包み込んで歌う「ふるさとの山影」をはじめとする全国合同企画へ積極的に取り組み、成功の力となった。

「地域祭典」

全道持ち回りで毎年うたごえ祭典を開催してきた北海道では、3順目の釧路で開催された。矢白別の平和盆踊りを祭典プレ企画としても位置づけ、祭典企画にも自衛隊演習場に反対する矢白別の闘いを柱に据えて感動を呼んだ。

九州各県持ち回り開催の九州のうたごえ祭典は宮崎で開催され、1400人を超える参加者で大成功させた。宮崎を襲った口蹄疫や鳥インフルエンザ、火山爆発や台風被害を乗り越えて元気になろうと、うたごえの枠を越えた共同の広がり、九州のうたごえの連帯が力となった。

長野でも、信濃のうたごえ祭典を大町で開催、開催地の専門家との共同が広がり、地元サークルの強化にもつながっている。

広島のうたごえ祭典は、2005年日本のうたごえ祭典後のうたごえの地域的な広がりを反映して広島市を離れ三次市で開催、「Great Journey」を柱に据えた企画は、開催地の専門家、音楽愛好家に広く受け止められ、広がりを見せた。中国ブロックの岡山のうたごえも協力して成功させた。

山形（毎年）、愛媛（隔年）でも県のうたごえ祭典が開催されている。奈良では「祭典」とは銘打たないが、うたごえ協議会が呼びかけ実行委員会をつくりPeace Concert in NARAを成功させた。

「産業別祭典」

港湾、教育、医療、電通、自治体、国鉄&私鉄、郵便、保育の9産業別の全国祭典、交流会がおこなわれた。

国鉄と私鉄のうたごえは「国鉄&私鉄のうたごえ祭典 in なごや」えり列車でいこみゃ〜」を初めて共同開催。闘争の勝利「和解」を勝ち取った国鉄と、合理化攻撃と闘い駅前にうたごえをと活動を続ける私鉄、公共交通で働くもの同士の祭典は、高校生のジャズオーケストラの参加も得るなど、未来へ闘いをつなぐ祭典として大きく成功した。交響曲「風雪」からの抜粋演奏は、ちば祭典コンサート企画にも引き継がれた。

教育のうたごえは「全国教育のうたごえ祭典 in あいち」すべての子どもたちに豊かな未来を」を3日間の日程で開催、多様な分科会や講座を開催しながら、国際交流、若い世代の参加も得「国と世代をこえて明日を奏でる」祭典として成功させた。

「電通のうたごえ祭典 in 名古屋「元気の出る音楽会」」は「仲間をひとりにさせない」を共通した思いに、多彩なプログラムが展開され、参加者を喜ばせた。全国電通労働者合唱団ザ・ナッツのファイナル演奏に大きな拍手が送られた。

「医療のうたごえ全国祭典「ふるさとの大地に響け！いのちと平和のハーモニー」」は被災地からの医療活動の報告も受け、創作曲をいかし、いのちを守る活動を確かめ合った。

愛知では、以上の5産別4祭典が約1カ月の間に連続して開催され、地元協議会として、連帯合唱団ユニイトを結成して連帯演奏、企画参加や組織・財政支援などを取り組んだ。中でも4産別祭典すべてに参加した東海青年の取り組みは祭典成功の力となった。

「郵便のうたごえ祭典・京都」は「国民のための郵政事業を うたおう未来へ」とどけよう平和への願い」をかかげ、保育のうたごえは「未来を生きる子どもたちをまんやかにして仲間が集い、歌いかわし、響きあいましよう」とよびかけ全国交流会をいずれも京都で開催した。京都うたごえ協議会は職場のうたごえプロジェクトを立ち上げ連帯して成功させた。

方針へ4）うたごえ運動の魅力・歌の広がりやうたごえ新聞読者でつなぎ、「うたごえ発ジャーナル」を一層輝かせる。

『うたごえ新聞・季刊』『日本のうたごえ』

うたごえ新聞は、ちば祭典成功を軸に、国内外の人々の声・願い・運動を伝え、全国のサークル・合唱団の活動交流の紙面づくりで年間の編集にあたった。

日本航空の不当解雇撤回の闘い、自給圏を守るTPP反対運動、中東の「アラブの春」から「タハリール広場からの歌声」を特集した年開け。そして、遭遇した3・11で編集内容は大きく変わった。

震災直後いち早く届いた被災地宮城からの日曜うたごえの通信に始まり、岩手からは支援に駆けつけた状況が、福島からは体育館の避難所でうたごえの通信はじめ、全国からの歌での支援行動の通信・情報提供は文字通り、うたごえ発ジャーナルの真価を発揮するものとなった。

震災の被害が特に福島で東電福島第一原発事故による放射能汚染などを追って深刻となる中で、全国の支援行動、東北の「みんなで歌うロシアの歌『ふるさとの山影』」レコーディング、神戸市役所センター合唱団、大阪・合唱団昂の被災地への演奏支援、各地の「原発ゼロの社会へ」等、活発に伝えられ、震災復興への息吹を伝えた。

作家森村誠一氏の特別寄稿「東北大震災に想う」につづいて、氏の推薦による夏樹静子、諸田玲子氏など著名作家の寄稿も復興への運動を進める大きな示唆となった。

日航争議支援では、原告団への取材、寄せられた詩をもとに全国創作合宿で「あの空へ帰ろう」が生まれ、ちば祭典へとつながれた。年間を通じた取材・通信は歌での争議支援の大きな力となった。

ちば祭典に向けては、祭典を紙面からアピールし、協力者の輪・読者を広げようと結成された「ミルフィーユ千葉」とともに編集にあたり、千葉の押し出し、取り組み紹介、ゲストへの取材など祭典の魅力を豊か

に伝えた。

800回をこえる池辺晋一郎氏の「空を見てますか」はじめ紙面の幅を広げる専門家の協力による好評の各連載。

また、視覚障害者に向けて発行の「声のうたごえ新聞」も1100号を迎えた。

読み手は作り手・伝え手、と全国で開催を呼びかけている「うた新フオーラム」は、東京、京都、福井（北陸）で開催。運動をつくる財産として紙面づくりへの参加、読み交流し、読者を広げるために開催を一層広げていく必要がある。

季刊「日本のうたごえ」はNo.151〜154を発行。No.151は、愛知での青年のうたごえ祭典成功を受けて若い息吹を青年座談会で、また、国際政治学者の畑田重夫氏による「日本国憲法と今の暮らし」を特集。

No.152は、高遠菜穂子さんの記念講演「命に国境はない」イラク戦争とは何だったか？」をメインに総会特集。No.153、154は3・11から焦眉の原発問題を、原発問題住民運動全国連絡センターの野村存生氏、福島から住民運動全国センター筆頭代表委員の伊東達也氏のお話で紹介し、「原発ゼロの社会へ」の歌づくりにつなげた。また、No.153では、戦後65年企画として、音楽評論家小村公次氏の寄稿「『徹底検証 日本の軍歌―戦争の時代と音楽』のこと」。No.154では宮城のうたごえ震災復興プランを。演奏普及の実践から、埼玉合唱団の「埼玉土建40周年記念文化行事でとりくまれた340人の土建合唱団」、市民に大きく広げてとりくまれていく教育のうたごえ祭典から紹介。

ちば祭典のとりくみは年間の柱として、準備の中で広がる協同を随時特集した。

季刊発行のサイクルを活かし、うたごえ加盟員全員購読の達成、それにあわせた運動の手引きとなる実践を掘り下げた企画の追求は次年度の課題となる。

方針へ5うたごえ出版物をより多くの人にひろめる。

「事業・普及活動」

事業・普及活動は、今年度も「参加型」の取り組みが成果を上げている。

北海道・東北のうたごえとの共同制作によるCD「みんなで歌うロシアの歌 ふるさとの山影」は、東日本大震災、原発事故により制作自体が危ぶまれたが、論議を重ね、復興にむけ「うた」で繋がったこの「こえ」を届けよう、と当初の予定通り東北交流会を開催し、レコーディングを行った。このレコーディングは、まさに「魂のうたごえ」となり、その後の普及の取り組みにも、大きな意味を与えるものとなった。「2011年メーデー歌集」では、不当解雇と闘う日航労働者を支援しようとして創作された新曲「あの空へ帰ろう」を掲載。春闘・メーデーをはじめ、支援集会などで積極的に歌われ「闘いの力」となった。メーデー後もたくさん集会や、祭典の取り組み、被災地や避難所での「うたう会」でも活用され、前年を上回る3300部を超える普及となった。資料用CD「あの空へ帰ろう」は祭典企画ともかみ合い好評。

国鉄のうたごえとの共同作成第2弾CD「明日への道」は、「国鉄・私鉄のうたごえ祭典」での演奏を収録。交響曲「風雪」より「道」はちば祭典コンサートでも演奏され普及の力になった。

ちば祭典合唱曲集「あなたとうたおう」には祭典全国企画のほとんどを掲載し、また、青年のステージ用に別冊も制作し「うたって参加」の重要な役割を果たした。歌詞集「うたごえ喫茶ソングブック828」は、うたごえ喫茶で使い易いものと、企画・制作において、うたごえ喫茶での司会者や伴奏者、主催者の方々の協力も得、予約活動の中で話題となり、はばひろい「うたごえ喫茶」関係者に歓迎されている。今後、伴奏のためのコード付きのバイナード式楽譜集、「うたごえ楽譜」でのダウンロード販売にも期待が高まっている。

荒木栄の没50年を記念してDVDブック「労働者作曲家 荒木栄」

を発売。荒木栄の創造、生き方を現在に生かす教材として最適との声もあり、九州祭典を準備している大牟田をはじめ全国での普及が始まった。

事業普及活動で前進しているところは、演奏会や演奏先での販売普及にとどまらず、さまざまな集会・イベントなどで販売を行い、独自のチラシ・注文用紙などを作成し、工夫している。また、メーデー歌集や「あの空へ帰ろう」の普及では実際に現場に足を運びうたうことで歓迎され広がっているのも特徴である。「ふるさと山影」を普及しようということが被災地の支援につながると取り組んだことも成果としてあげられる。

サークル・合唱団、協議会が連携しての取り組みで、事業普及活動の連帯した広がりも生まれている。

音楽センターのホームページでは、この間改善を重ね、また「うたごえ楽譜」でのダウンロード販売の楽譜数も増やしている。楽曲配信ではiチューンなどによる楽曲数も増やし絶版、廃盤になった商品の楽曲を提供している。

方針〈6〉演奏・創造を発展させ、また、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育をすすめる、次代を担うリーダーづくりを計画的にする。

〔学習・教育活動〕

北海道や九州、東海など、各地で県内講習会やブロック講習会、うたごえ学校等が開かれ、専門家による声楽指導や合唱指導、音楽創造への協力なども盛んにおこなわれ、地域祭典や全国祭典の力にもなっている。大阪指揮研究会、東京指揮「考」座、関西合唱団日曜講座などの継続した取り組みは、学びあう場として貴重であり、受講者が演奏普及のリーダーとして成長し、自覚が生まれるなど多くの成果を出している。また、国内指揮研究会なども演奏普及の担い手を増やす上で重要である。

全国合唱講習会は東西で行われ、ちば祭典の全国合同曲を中心に豊か

な音楽創造で大好評を得た。西日本（岡山129人）では、東日本震災で大きな被害を受けた中で日本のうたごえ祭典を取り組む千葉の仲間への、そしてそれにつながる東日本の仲間への思いが多く語られた。歌に描かれるのは自然と共に生きようとする人間の姿であり、歌うべき歌がある喜び、を感じさせた講習会であった。東日本（千葉155人）でも、心／叫び／歌、これはまさに今だからこそ歌いたい曲、合同曲のすべてが今を歌う曲、と祭典開催の成功への大きな確信と共感が得られた講習会となり、祭典の音楽づくりの大きな力となった。

全国指揮・合唱指導講習会（松本107人）は26回を迎え、年々充実度を増している。コース別指揮法、指揮特別講座、合唱特別講座と内容は定着し、継続的な参加者の成長も著しいが、更に前進するための検討もあらためて考えたい。指揮受講者だけでなく合唱参加者にも得るものは大きく、新しい指導者・リーダーの育成を視野におき、合唱団としての積極的な参加運動も大切である。

日本のうたごえ合唱団2011は178人で結成され、新春合宿と東西の練習会を経て、ちば祭典では「コンサート」に出演し、優れた演奏を示した。自主的な参加による全国合唱団だが、実践的な教育の場としても得るものは多い。

ちば祭典における大音楽会のそれぞれの演奏は、大震災を経て、あらためて音楽の果たす役割、歌われる言葉の重みとその表現の大切さを考えさせ、質の高い演奏を生み出した。全国的な演奏参加の面では、登録活動、練習計画など、さらに意識的な活動が必要である。

うたごえ運動の創造理念、何を、誰に向かって、どう歌うか、など合唱発表会講評、専門家の指摘等にも示唆に富む内容が多い。専門音楽家による指導、指揮なども多く見られる中、さらに協力、共同を進めるともに、うたごえ運動における創造の特徴なども幅広く学習を深めていく必要がある。

学習・教育活動をさらに充実させる上で演奏会、講習会などの情報交換、指揮者・指導者の問題意識の向上・交流などをすすめるべく指揮者・指導者ネットワークづくりが始まった。

方針(へ7)青年サークルづくりを積極的にすすめ、次代を担う青年をたくさん迎える。

「青年のうたごえ」

2010年に、新しいつながりを生み出しながら開催された全国青年のうたごえ祭典・あいち「とうぎやざういずあす☆」にここに集った青年たちが、新しい仲間も増やしながら2011年に県内で開催された5産別の4祭典(国鉄・私鉄・教育・電通・医療)すべてに関わり、演奏や当日の運営に充実感を持って取り組んだことは、当該産別のみならず、全国の青年たちに対しても大きな刺激となった。

ちば祭典・青年のステージも、この愛知の取り組みを参考にし、様々な団体とつながりながら準備を進めて行った。全国青年のステージは東日本大震災を受けて、祭典の意味合いをより重く感じる中で、選曲がなかなか決まらず、スタートと具体化が遅れた。祭典後、千葉の参加者からは「もっと周りに声をかければ良かった」との声もあり、ステージに確信を持って取り組むために必要な期間の確保(企画の早期具体化)が課題として見えた。

一方で、うたごえ祭典への取り組みが「千葉の青年の求心力となった」という感想も出され、多彩な団体の青年が集まることへの要求も高まり、千葉県青年団体協議会(仮称)という動きに発展している事は、うたごえ運動の本領を發揮した成果といえる。ステージそのものも、全国の青年の奮闘、保育のうたごえとのコラボレーションにより、高い評価を得る内容となった。

福井で開催された全国青年のうたごえ交流会「みんなでつながろっさ」には、全国から74人が参加し、福井のうたごえ協議会の協力も得て、分科会・合唱発表会などを行い、ちば祭典へとバトンをつなげた。

東日本大震災の被災地、宮城の青年のうたごえサークル「若星Z☆」

(わげずたーづ)が、福井の全国青年交流会、ちば祭典青年のステージに参加できたことは、本人たち・全国の青年双方にとって大きな刺激と励ましになった。

『震災だから』じゃすまされない! まともな暮らしと人間らしい生活を! と開かれた全国青年大集会に向けては、各地のプレ企画で青年のうたごえが関わるシーンもあり、当日もミニコンサートや送り出しに取り組み、ちば祭典をアピールした。

原水爆禁止世界大会の関連企画として開催された「核兵器をなくす青年交流集会」Ring! Link! Zero! でも、青年合同曲「Hey and」を歌い交わすシーンが実現している。

しかし、このように貧困格差解消や脱原発に立ち上がる青年たちの数・勢いに対し、うたごえ運動に結集している青年の絶対数は、少なすぎるとさえ言える。2012年に開催される全国青年のうたごえ祭典 in 大阪に向けては、すでに準備が始まっているが、これは2013年の日本のうたごえ祭典 in 大阪、そしてうたごえ運動65周年の先も見据えて取り組んでいきたい。

方針(へ8)サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会づくりをすすめる。また、ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

「会員拡大、サークル建設、協議会建設強化」

歌いたい、つながりたいという思いがたくさんある中、積極的に演奏活動やうたごえ、うたごえ喫茶を繰り広げる中で、うたごえの影響力を強め、会員拡大、サークル拡大につながっている。

震災をうけての救援活動一つを見ても、各地にうたごえ協議会が存在し、その全国ネットワークが存在していることの大切さが立証された。

京都では地域祭典(合唱発表会)の中でうたごえ協議会加入とうたご

え新聞読者拡大を位置づけ、6団体の新加盟する成果を上げている。

神奈川、東京、奈良、福岡など、合唱発表会などの取り組みを通じ、意識的な働きかけの中で新しい加盟団体を迎えている。

青森では再建された青森センター合唱団を中心に、協議会も定着し県内の情報を共有できるようになっている。

山形は県のうたごえ連絡会として県祭典を開催するなど連帯活動が強まっている。

大分や宮崎では協議会建設を視野に入れた活動がおこなわれている。ブロック活動では、東北ブロックは東北交流会をレコーディングコンサートも位置づけ成功させ参加者はもとより、全国を励ます活動をした。

関東・東京は神奈川でブロック交流会を開催、ちば祭典と連動した企画で祭典成功にも寄与した。東京が主体となって取り組んでいる大島での交流会準備の中でサークル建設やうたごえ新聞読者拡大の動きが出ている。

北陸ブロックでは、合唱発表会を各県で開催するようになったため、ブロック交流会を改めて開催しブロックの連帯を強めている。

初めての東海ブロック交流会は名古屋でおこなわれ、ちば祭典合同曲を各県の音楽リーダーが指導する合唱講習なども取り入れた。

関西ブロックは毎月ブロック会議がもたれ、時々の課題を共有し、西日本合唱講習会をブロックの責任で成功させ、ちば祭典へも大きく連帯した。

中国・四国ブロックはブロック責任者が各県に連絡を取り、時にはコンサートに足を運ぶなどしながらブロックの連帯活動に力を入れている。広島県の祭典に岡山からの参加が実現し、愛媛・高知の連帯や、うたごえサークルのない島根や鳥取も視野に入れた活動が始まっている。

九州ブロックはブロックとしての合唱講習会開催などを通じて宮崎での九州祭典、大牟田での全国創作合宿を成功させた。

沖縄では沖縄のうたごえ祭典開催の準備が始まった。

「うたごえ新聞、季刊」「日本のうたごえ」読者拡大」

11年度は、すべての会員がうたごえ新聞を購読し、会員の自覚した運動を創り上げていこうと方針を持った。年間を通じてニュースをブロック担当の力も借りて発行し続け、一定の成果を上げた。「サークル、合唱団に入ったらうたごえ新聞は読むもの」という意識化が定着してきた団体も増えている。

祭典開催地千葉では千枚の葉ミルフィーユを祭典実行委員会の中に確立し、うたごえ新聞の読み、つくり、広げる活動を展開した。祭典の準備の中で134人の新しい読者を産みだし、毎週のように報道される千葉の情報は祭典成功の力となった。

練習時間に「読みどころ」を語ったり、機関紙にうたごえ新聞関連の記事が連載されるなどの例も各地であり、一定水準の読者数を保っている力となっている。

月一度のカラー化を継続してきたが、毎週カラー化を目指し、更大きな奮闘が期待されている。

合唱発表会参加団体が近年最高になっていることなどを見ても読者拡大の条件は広がっている。

季刊「日本のうたごえ」読者数はここ数年、会員の約半数の購読にとどまっている。優れた内容を生かし、学習会、講習会の教材や、普段の練習での活用など、全会員が購読して運動に役立てていく取り組みが求められている。

方針へ9うたごえ運動の中での「郷土のうたと踊り」の位置づけを高め活発にし、全国講習会等を充実させる。

「郷土のうたと踊り」

ちば祭典・大音楽会プロローグとして銚子正調大漁節保存会ひびき連合会の指導、協力を得て取り組まれた全国郷土合同「跳ね込み太鼓」「早

打ち太鼓「大漁節」は地元全国の取り組みで、勇壮な開幕となった。ただ、関東メンバーを核として全国からの参加はあったものの、全国合同として広範な地域からの参加までには至らず、今後の全国合同の位置づけに課題を残した。

全国郷土講習会については、大震災の影響で一時期開催も危ぶまれていた東日本郷土講習会を、全国講習会として犬吠埼ロイヤルホテルを会場に開催。千葉・東京・神奈川・静岡・愛知・大阪・兵庫から77人の参加で、銚子はじめ、震災に沈む日本を鳴物の元気で蘇らせようと熱の入った2日間となった。

うたごえにおける郷土活動は全国でも多岐に取り組みされており、また、運動内外を超えて広がっている。毎年開催されている「江戸やつこまつり」では参加グループも増え交流を深めている。京都では地域祭典の中で合唱の発表交流と一緒に郷土のうたと踊りも交流されている。合唱団の中で郷土部のあり方も様々ではあるが、活動を工夫することによって太鼓サークルから歌い手としても参加してきている例もある。

新たな民族芸能を掘り起こし、継承することや、合唱運動との連携なども視野に入れながら、ネットワークの強化が求められている。

方針へ100世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる。

〔国際交流〕

東日本大震災は国際的にも注目され、この間交流を続けてきた韓国、中国、アメリカ、スイスなどからも応援のメールや、チャリティーコンサート開催のようが伝わってきた。

13年目になった韓国との音楽交流は、13人の代表が参加し、5・18光州民衆抗争芸術祭参加を柱に、仁川、ソウルでの救援募金活動など、地元メディアからも注目を浴び新たな絆をつくることになった。ち

ば祭典にはこれまで参加していた仁川市民合唱団平和の風に加え、ハンギョレ統一文化財団平和の木合唱団も来日し、合同のステージを実現した。

震災直後におこなわれた紫金草全国ネットワークの第7次南京公演には、被災地仙台からの参加もあり、暖かい歓迎を受けた。

愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団はインドのボンフリーアートスクールとの交流の中から、メンバー6人を招き、日本母親大会、原水爆禁止世界大会、全国教育のうたごえ祭典参加をはじめ、東京、大阪、広島、福岡、長崎で、運動内外の協力でコンサート、ワークショップなどを成功させた。

2011年日本のうたごえ祭典ごちば



2011年日本のうたごえ祭典ごちば実行委員会

1. はじめに

「たくさんの人たちと歌えて、本当に感動したし、エネルギーをもらいました。あれだけの人たちが心を一つにして、歌い上げたから、達成感もありました。音楽の力って、すごいなうって改めて思ったし、本当に参加できてよかったです」。これは、祭典に参加した青年の感想である。

2011年日本のうたごえ祭典 in ちばは、全国と千葉の仲間の奮闘

により、企画、組織、財政の全ての面で大きく成功した。この成功には、専門家や諸団体の大きな協力が不可欠だった。ここに、心からのお礼を申し述べたい。

これまでの祭典運動の蓄積を生かした全国からの知恵と企画参加は、震災復興への強い思いもあり、「ふるさと山影」をはじめ、全国合同企画への積極的な取り組みによって、感動的な舞台を創り上げる力となった。組織的にも、被災地からは、近年にない参加者組織を達成したほか、賛同金、賛同広告、参加者組織で全国の目標を達成し、開催地と連帯した取り組みで祭典成功の大きな力となった。

2011年は東日本大震災とその後原発事故を避けては語れない年であり、今回の祭典を準備する過程では、祭典に関わった私たちはうたごえとは何かを、否応なく深めさせられることになった。しかしこの経験は祭典に十分に活かされ、結果として祭典の成功に大きく寄与することになったと思われる。

2. とりくみの経過

2008年に、日本のうたごえ全国協議会から、千葉での祭典開催の要請を受け、千葉県うたごえ協議会は、開催の可能性について検討した。当初は、否定的、消極的な意見もあったが議論を尽くし、県うたごえ協議会臨時総会（2009年9月）で、正式に祭典開催を決定した。

その後、準備会を発足させ、正式に祭典準備に着手した。準備会（10回）では、訪問または郵送により、県内の約600団体に祭典実行委員会への参加要請を行うと共に、賛同よびかけ人の組織を行った。2010年8月1日に第1回実行委員会を開催した。このとき、以下の五つの柱からなる基調が提案され、承認された。

一、一人ひとりがみな等しく大切にされ、安心して豊かに暮らしている明日を願ってうたいます（生きる・命）。

一、海に囲まれた自然豊かな千葉県、そして、私たちの国 日本。こ

の生命育む大地の恵みを音のメッセージに乗せて子どもたちに伝えます（環境）。

一、「世界から核兵器をなくしたい」、「戦争のない世界を！」という平和への思いを歌に込めて世界に発信します（平和）。

一、千葉の伝統や芸能を大切に、これを、日本のすみずみに発信します（千葉の伝統と芸能）。

一、世代や立場の違いを越え、多くの人とつながり、共感の輪を広げ、これを歌に託します（つながる）。

実行委員会には県うたごえ協議会以外に8団体（全日本年金者組合千葉県本部、市原平和フェスティバル実行委員会、市川三番瀬を守る会、ヒューマン・ファーマーズ、障害者の生活と権利を守る千葉県連絡協議会、千葉県健康友の会連合会、年金者組合市原支部、農民運動千葉県連合会）を組織した。これらの実行委員会参加団体は、チケット普及や要員組織において大きな力を発揮した。また、年金者組合千葉県本部、障千連、ヒューマン・ファーマーズ、農民連の4団体は、ステージ担当者も出した。

日本のうたごえ祭典開催の経験が全くない私たちにとって、大音楽会の運営に何らかの形で関わっておくことは非常に重要な課題だった。そこで、2010年日本のうたごえ祭典 in 長崎実行委員会に対して、大音楽会に要員として参加できるようにお願いし、千葉から50人が参加した。この取り組みは、参加した各人が、大音楽会の運営についてイメージをつかむために大きな意味をもった。

2011年3月11日に起こった東日本大震災と、その後の原子力発電所の事故は、祭典の取り組みにも大きな影響を与えた。一時は、祭典開催を躊躇する意見も出たが、実行委員会として、こういう時こそうたごえが求められるのであり、祭典を成功させることが復興に寄与することになるという視点から意思統一を行った。その際、自分たちも被災した中で、全国でもまっさきに歌い始めた東北のうたごえの仲間からの発信は、千葉のうたごえが意思統一する上で決定的な意味をもった。

祭典準備の過程で取り組んだ活動のうち、メイデー、「日本航空の労働

者を励ますつどい」「東日本大震災復興支援 響け いのち 平和 チャリティコンサート」「全国教育のつどい」における演奏は、それぞれの取り組みの成功に大きく貢献すると共に、歌い手もまた、たたかいから多くを学び、その経験は参加者組織と音楽づくりを生かされ、祭典の成功につながっていったという点で、取り組みの節目となった。

なお、黄色い祭典はつぴは、演奏、広報宣伝、事業活動等の際に、非常によく目立ち、大きな効果を発揮した。

3. 企画のまとめ

(1) 企画の立案と構成

① 企画立案の経緯

準備会の段階から語られてきた思い（色々な人・新しい人とつながりたい、さまざまな環境の問題・平和・憲法9条への思い、生きていくということ、すべてに共通する命の大切さ等）および祭典基調とを照らし合わせ、「環境」「平和」「生きる」を三つの柱に、「つながる・ひろがる・共感」をキーワードに設定した。そして、祭典を通じて千葉県中を元気に、その元気を全国へもって帰ってもらいたい、そんな思いで準備を進めた。立案に際しては、アンケートも実施した。

千葉の優れた演奏と、全国から寄せられる祭典への期待に応えるために、大音楽会とコンサートの二つの音楽会を企画することにした。多様な音楽を聴いてもらうために、大音楽会・コンサートとも、器楽の演奏が入るようにした。

東日本大震災と、その後の原発事故により、今伝えるべきは何なのか、私たちは再考を迫られた。その結果、三つの柱は変える必要はないことを確認した。ただし、「環境」はすべての命を大切に思う気持ちを込め「生命（いのち）」と改めた。また、キーワードに「明日への希望」を加えた。震災とその後の事故は決して望まれるものではないが、これを機に、そ

れまで取り組んできた曲の一つ一つが意味を深め、歌う意味が明確になっていった。

② 企画の構成

a. 大音楽会

大音楽会は「生命（いのち）」「平和」「生きる」の3本の柱を第一部・第二部・第四部（第三部はうたう会とアコーディオン合同）として構成した。

オープニングは千葉の伝統芸能を伝えるべく、銚子の太鼓・踊りとした。

第一部は、「生命（いのち）」をそのコンセプトとして選曲を進めていたが、東日本大震災からの復興への願いを込め、プログラムに新たに「ふるさとの山影」を加え、第一部の始めに演奏することにした。ヒューマン・ファーマーズの演奏は、TPPや原発問題に対する私たちの怒りを代弁するものだった。また、「いのちの讃歌」は、子どもが参加したミュージカル仕立てで、新鮮な感動を与えた。

第二部では、大音楽会のメインとなる「Great Journey」を、編曲者の池辺晋一郎さんの指揮で歌うことにした。これは、前年の祭典・長崎での「Great Journey」の成功を目の当たりにし、より多くの全国の仲間と、今までで一番の「Great Journey」を作りたい、千葉でもたくさんの人とつながりたい、という思いからで、1000人で演奏するという目標を立てた。当日は、目標に近い人数で演奏することができた。組織的にも、音楽的にも大成功といつてよい。

きたがわてつさんの説得力がある歌声はメッセージを深く伝えた。女性のステージでも「童神」と一緒に歌うことができた古謝美佐子さんの歌声や歌う姿に多くの人が感銘を受けた。また、1998年から音楽交流を続けている韓国から、これまで参加していた仁川市民合唱団平和の風に加え、今年初めてハンギョレ統一文化財団平和の木合唱団が参加し、合同で演奏したほか、ファイナールでも私たちと共に演奏した。

第三部は、うたう会と全国アコーデオンの合同によって構成した。うたう会は、唐土久美子さん、きたがわてつさん、ゴリさんの巧みなリードで会場中を巻き込み、楽しい時間を作り出した。アコーデオンの合同は、若い人も多く参加した。

第四部「生きる」では、各ステージが合同で歌い、ステージを歌い継いでいくことにした。そして、最後は参加者全員の思いを寄せられる歌として「人間の歌」を会場全体で歌うことにした。「人間の歌」には、アコーデオンの出演者が楽譜をもつて次々とステージに上ったことは大変印象的だった。

大音楽会を通じて、日航の不当解雇問題、TPPの問題など、今伝えるべき必要のある曲目を取り入れるよう努めた。その典型は、本番一週間前に「ふるさとを汚したのは誰」の演奏を決めたことである。

b. コンサート

千葉県立幕張総合高等学校合唱団には素敵な歌声を届けてもらうことができた。ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉とは、単独の演奏に加え「21世紀のヒーロー」で合唱と共演することができ、観客だけでなく歌い手にも感動を与えた。和力、バラライカ&アコーデオンの北川翔さん・大田智美さんの演奏も多くの観客を魅了した。

郷土の音楽物語「花とふるさと」は、千葉の歴史に根ざした作品であり、当日は、十分な練習の成果を遺憾なく発揮した。また、国鉄闘争の解決を受け、交響曲「風雪」と、日本のうたごえ合唱団は、全国的な取り組みとして企画され、よく練り上げられた感動的な演奏を行った。

(2) 歌い手の組織化と音楽づくり

①組織目標の設定と組織化への取り組み

各ステージの歌い手目標数、指揮者・伴奏者、練習内容などは、企画委員会や各種の検討会議での検討を経て決定された。歌い手目標数は、

過去の祭典での経験に基づき設定され、各ステージ担当者の奮闘で歌い手を組織した。

②うたごえの創造的連帯と市民的広がり

どこに行くにも、歌い手募集のチラシをかばんに忍ばせ、ダメもとという気持ちで多くの方に声を掛けることが行われた。その結果、「いのちの讃歌」、女性のステージ、「21世紀のヒーロー」などでは、これまで、うたごえを知らなかった人にも、舞台上に立つてもらうことができた。

南房総には「花とふるさと」(コンサート)を歌う合唱団が結成された。その他、出前練習を実現し、定例化することに成功した女性のステージや「Great Journey」「いのちの讃歌」などで、多くの人と広く共同することができた。

特に「Great Journey」では、千葉県合唱連盟とのつながりができた。このことにより、合唱連盟の関連行事での歌い手組織の募集宣伝や、各支部への声かけができた。練習指導に粕谷宏美さん(千葉県合唱連盟理事長)、中川知夫さん(同事務局長)の力をお借りできたことは、少なくない歌い手を組織する力となった。

池辺晋一郎さんや岩本達明さん、武義和さんをはじめとした専門家の協力は、音楽づくりだけでなく、歌い手の組織化の面でも大きな力を発揮した。

また、これまでも千葉のうたごえに協力してくれた専門家の力は、女性のステージ、郷土の音楽物語「花とふるさと」「21世紀のヒーロー」などの各ステージ練習での指導や伴奏はもちろんのこと、歌い手の組織化にも、遺憾なく発揮された。

「Great Journey」の練習は、各サークル・合唱団、地域、合同練習会と、重層的に組織した。合同練習会には、東京、神奈川、埼玉、茨城など、関東各地から参加があり、当日の成功への力になった。また、この練習の中では、各サークル・合唱団の教育担当者も指導に当たり、力を発揮した。

オープニングの郷土のステージでは、全国郷土部および銚子大漁節保

存ひびき連合会の協力を得て、地元の祭りの再現に近い形で伝統文化を披露することができ、海から震災復興を祈る舞台を作り上げた。

③ 諸団体との共同

祭典を通じて、農民連や年金者組合、障千連、労働団体等とつながり、共同できたことは大きな意義をもった。

ブレ企画「しんのみ行動」など農民連との共同は、食と農や、放射能被害の問題をわがこととして捉えるきっかけとなった。ヒューマン・フアー・マーズの魅力あるリードは、食と農を考えるステージの成功へつながった。

シニアのステージの実現には、年金者組合千葉県本部の力がひととき大きな役割を果たした。歌い手の半数以上を組合員が占め、高齢者の熱気と思いを舞台いっぱい輝き放つことに成功した。

青年のステージの実現には、青年たちの並々ならぬ熱意があった。労働組合青年部などに出向き、祭典には歌って参加を！ と呼びかける中から、共同で企画に取り組む青年が増え、少なくない歌い手の組織ができた。青年同士でつながりたい、交流したい、との思いで祭典に取り組んだことにより、祭典終了後に「うたごえ祭典は青年の求心力になった」等の感想が出され、さらに、千葉県青年団体協議会（仮称）を作ろうとする動きも出てきている。

大震災とその後の原発事故を経て、多くの人が、共に生きる合同「人間の歌」を歌うことに意義を見いだした。障千連では練習会を開催して歌い手を組織した。

(3) 全体として

今回の祭典では、大型ビジョンを2カ所に設置したほか、2階スタンド舞台前にジョーゼット幕を設置した。大型ビジョンは歌い手の表情、歌詞や写真を届けることができた。ジョーゼット幕は背景として使うこ

ともできた他、演出面で大いに効果を発揮し、好評を得た。スタッフ・その他映像の構成などに関わった方々のご尽力に感謝の意を表したい。

心つながぎ、いのち輝かせて 歌おう 希望の歌を！

2012年 方針

3・11以降、日本の政治のゆきづまり、閉塞感が一層、覆う社会のなかで、一方では、震災復興へ、自分も何かしたい、力を合わせてこの状況を変えていきたいという変革のエネルギーがうずまいていることも、様々な支援活動や行動が語っている。

このエネルギーをつなぐ、時代をひらくうたごえはますます求められている。

「うたごえは平和の力、生きる力、復興と平和で安心して暮らせる国づくりへ」、人びとの願いや思いを歌にし、多くの人に届ける普及・演奏を展開しその広がりをうたごえ新聞読者や協議会加盟に結び、うたごえの組織の拡大、そして次代を担うリーダーづくりと学習・教育を旺盛に展開していくために、2012年度以下の活動方針を進めたい。

**方針へ1）演奏・普及活動を旺盛に展開し平和憲法・九条をまもりい
かす。共に生きる町づくり・地域づくり。のうたごえを広げる。**

① 東日本大震災被災地への支援と復興・再生、原発ゼロの社会をめざす「うたごえ復興・再生のためのプラン」を持ち、そのプロジェクトを立ち上げ、震災・復興支援、原発ゼロの社会への歌を創り広げる。

② 「いつでもどこでもうたごえを」を合言葉に、多種多様な形態で大

勢の人とともに歌う 喜びをひろげる。

・ 平和のうちに働き、生きる想いを歌にして、職場、地域からうたごえを起こす。

・ 全市区町村で「みんなうたう会」を計画を持って実践する。

歌詞集「うたごえ喫茶ソングブック828」運用と司会者、伴奏者を意識的に育てる

③多くの人が「こぞつて歌える」愛唱歌を創りだす創作運動を活発にする。

・ 意識的な創作活動を続けている全国の取り組みから学び、「みんなつくり歌う運動」を広げ、創り手を生み出し、創作活動と作品交流を活発にする。

・ 創作合宿の参加者を増やし、創作講習会開催の計画を持つ。

オリジナルコンサートの充実とともに「オリジナルソングブック」の活用を強める。

④歌う喜びを出発点に、いのちや音楽の輝きを人々に届ける豊かな演奏創造を發展させる。

方針へ2合唱発表会を地方、産業別、全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い、創造の前進をめざす場にする。

①合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏・講評を通じて交流し学び合うという発表会の原点をいっそう輝かせる。広く参加団体を呼びかけるとともに、開催の仕方、運営を工夫し、豊かな交流ができる合唱発表会づくりをめざす。

②合唱発表会参加団体を1400団体に、未開催県の今年度開催計画を持つ。

方針へ3地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

①うたごえを起こし、新たな発展をめざす地域、都道府県、産業別、階層別祭典を活発にする。

今年度は、合唱発表会を中心に全国交流会を開催し、各地域、都道府県、産業別での祭典を積極的に開催する。

②うたごえ65周年2013年日本のうたごえ祭典・大阪（仮称）開催の準備を進め、14年以降の祭典計画を持つ。

方針へ4うたごえ運動の魅力・歌の広がりやうたごえ新聞読者でつなぎ、「うたごえ発ジャーナル」を一層輝かせ読者拡大につなげる。

全国の多彩な活動を豊かに交流し、運動の輪、読者の輪を広げるために、「読み・作り・広げる」活動を強め、ひきつづきうたごえ新聞フォーラムの全都道府県開催（未開催県の意識的開催）、うたごえ新まつりを計画し、幅広く読者を迎える。

サークル・合唱団、協議会等で、うたごえ新聞を真ん中に、紙面の感想、記事への要望を語り合い、記事をつくり、うたごえ新聞を身近に感じ合い、運動の力、広げる力にする。

季刊「日本のうたごえ」は、運動づくりのテキストとしての位置づけを高め、積極的に活用し、読者を迎える。

方針へ5うたごえ出版物をより多くの人にひろめる。

①うたごえ出版物の役割と位置づけを深めみんなのものにし、音楽センター出版物をはじめ、各うたごえ出版物の旺盛な普及活動を進める。「みんなうたう会」等で歌詞集「うたごえ喫茶ソングブック828」を意識的に広げる。

②「一人から一人へ、草の根のつながり、連帯、共同、共感」を大切に、「参加型」の取り組みを今後も重視する。「うたごえ楽譜」のネット配信などすすめる。

方針へ6)演奏・創造を発展させ、また、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育をすすめる、次代を担うリーダーづくりを計画的にすすめる。

それぞれのサークル・合唱団・協議会で教育を日常の練習や活動の中で行うことを重視するとともに系統的に各種講習会への参加を強める。演奏・創造活動を豊かに発展させ交流し、批評活動や運動の理論活動をすすめる、力にしていける。

①うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」を積極的に活用するなど、学習・教育活動を活発にし、次代を担うリーダーづくりを計画的にすすめる。

②各種全国講習会へのサークル・合唱団からの参加を強める。

③各協議会、ブロック等で指揮者・指導者の交流を活発にし、そのネットワークづくりをすすめる。

方針へ7)青年サークルづくりを積極的にすすめる、次代を担う多くの青年を迎える。

①サークル・合唱団で青年を迎える目標を意識的に持ち、仲間づくり、サークルづくりと団体・分野を越えたネットワークづくりを強める。

②「運動する力」「音楽する力」をつける「学びの場」を系統的につくる。

③第6回青年のうたごえ祭典(大阪)を全国の連帯で成功させ、2013年65周年日本のうたごえ祭典につなげる。

方針へ8)サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会のづくりをすすめる。また、ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

①サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やす。

②合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」の読者を増やすことをサークル・合唱団で討議し、目標を持って計画的にすすめる。

③加盟団体500団体をめざし、うたごえ協議会のない県のうたごえ協議会の確立目標を持つ。

創刊55周年に達成したうたごえ新聞読者の早期回復と最高時のうたごえ新聞読者めざし、さらに広げる。季刊「日本のうたごえ」は、運動づくりのテキストとしての位置づけを高め、積極的に活用し、会員の全員購読をすすめる、倍加をめざす。

方針へ9)うたごえ運動の中での、「郷土のうたと踊り」の位置づけを高め郷土芸能の掘り起こしと継承、全国の活動の経験交流等を活発にし、全国講習会を充実させる。

方針へ10)世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる。

おわりに

心 つなごう 愛を つなごう 手と手を つなごう 乗り越えてゆこう… 『心 つなごう(2011年3月11日)』より

昨年の東日本大震災の中で生まれたこの歌は、日本のうたごえ祭典inちば・大音楽会でも日韓合同のうたごえで千葉ポトアリーナに響いた。

「私たちに何が出来るのか」「何のために誰のためにつくり歌うのか」を問い、大きな悲しみや怒りをはじめ様々な思いを込めた歌を創り、歌い、人と人の心をつなぎ生きていく力となっていた。

今年折しも、時代と対峙し、闘いの中から数々の名曲を創った労働者作曲家荒木栄没50年である。荒木栄は、歴史に刻まれる労働者の大闘争・三池闘争が、条件付きで妥結した年、大雪が降った年の瀬に、大地を覆う雪の重みのその下から、春を待つ労働者たちの想いをこめて「仲間」のうたを作った。

泥の靴が 踏みにじっていった あの炭鉱にも この街にも そのどこかで どこかで 花咲かす 準備をしている 仲間

東日本大震災の被災から復興へと向かう人たち、平和な社会へ、暮らしをまもろうと生きる人たちと心合わせて歌おう。今の時代を歌う歌を作り、歌い広げて絆を強め、震災復興・再生、「原発ゼロの社会」へと歩みを進めていこう。

◆2012年主な日程予定

◎日本のうたごえ全国交流会 11月23日(金) ～ 25日(日) 広島

◎うたごえ祭典・交流会

- 東海のうたごえ交流会 5月19日(土) ～ 20日(日) 三重
- 東北のうたごえ交流会 in 青森 6月30日(土) ～ 7月1日(日)
- 東京・関東のうたごえ交流会 in 大島 7月7日(土) ～ 8日(日)
- 兵庫のうたごえ祭典 7月15日(日) ～ 16日(月)
- 全国教育のうたごえ交流会 in みやぎ 8月4日(土) ～ 5日(日)

- 青年のうたごえ祭典 8月11日(土) ～ 12日(日) 大阪
- 港湾のうたごえ祭典 8月25日(土) 東京
- 自治体のうたごえ祭典 in 京都 9月9日(日)
- 国鉄・北海道のうたごえ祭典 in あさひかわ 9月15日(土) ～ 16日(日)

医療のうたごえ祭典 in 京都 9月16日(日)

保育のうたごえ全国交流会 9月予定

電通のうたごえ祭典 in 神奈川 10月13日(土) ～ 14日(日)

信濃のうたごえ祭典 10月14日(日) 佐久

九州のうたごえ祭典 in 大牟田 10月20日(土) ～ 21日(日)

私鉄のうたごえ祭典 11月17日(土) ～ 18日(日) 東京

郵便のうたごえ祭典 9月 名古屋

沖繩のうたごえ祭典 10月予定

◎講習会

- 全国郷土講習会 4月21日(土) ～ 22日(日) 東京
- 西日本合唱講習会 5月4日(金) ～ 5日(土) 京都
- 西日本郷土講習会 5月5日(土) ～ 6日(日) 兵庫
- 全国創作合宿 5月11日(金) ～ 13日(日) 山形
- 東日本合唱講習会 5月19日(土) ～ 20日(日) 新潟
- 全国合唱指揮・指導講習会 6月15日(金) ～ 17日(日) 松本
- ◎全国大会・集会
- 3・1ビキニデー集会 2月28日(火) ～ 3月1日(木) 静岡
- 原水爆禁止世界大会・広島 8月4日(土) ～ 6日(月)
- 原水爆禁止世界大会・長崎 8月8日(水) ～ 9日(木)
- 第56回日本母親大会 8月25日(土) ～ 26日(日) 新潟
- 日本平和大会 11月22日(木) ～ 25日(日) 東京